

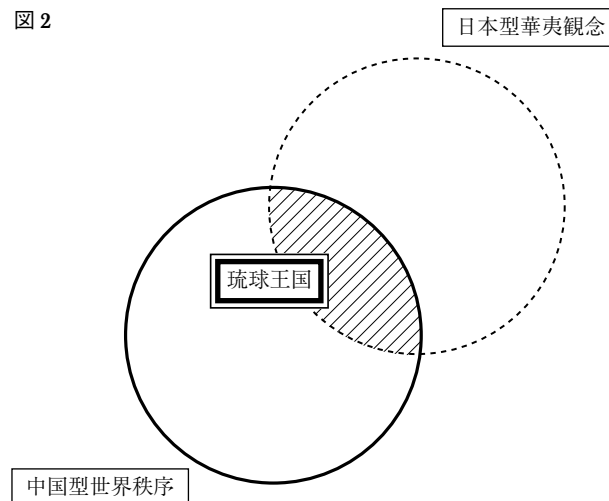
近世琉球における中国人漂着民の船隻・積荷の 処置の実態 — 日本と中国の狭間で —

渡 辺 美 季

1. はじめに

琉球王国における近世とは、一般に 1609 年の薩摩藩の琉球侵攻から、1879（明治 12）年の琉球処分までの期間と定義されている¹⁾。これは琉球が、14 世紀後半以来の中国（明・清）との君臣関係（冊封・朝貢関係）を維持したまま、幕藩制国家の支配領域に包摂されていた時期を指している。つまり、中国と日本という二つの大国の支配論理が、琉球において重なり合っていた時期と言い換えることが出来るだろう。近世琉球は国王を頂点とした首里王府が王国を治める固定的な国境 (boundary)²⁾を持った国家であったが（図 1 参照）、前述の意味では、中国と日本の支配論理のゾーンの境界 (frontier)³⁾であった⁴⁾。この状態を示したものが図 2 である。この図において中国の支配論理を実線で日本の支配論理を点線で示してあるのは、両者の間には明確な相違があったからである。ロナルド・トビはこれを、広く国内外に認められていた「中国型世界秩序⁵⁾」と、日本国内のみで通用した観念的構築である「日本型華夷観念⁶⁾」とに区別している⁷⁾。例えば、琉球が日本の支配下に入った事実は、薩摩藩の命令により中国（清）に対して体裁上隠蔽されていたが、これも中日の支配論理の違いから

図 2





* 1611 年に琉球領から薩摩領へ。
但し琉日関係隠蔽のため清に対
しては琉球領の建前が貫かれた。

出典：宮城栄昌・高宮廣衛編『沖縄歴史地図〈歴史編〉』
柏書房，1983，44-45 頁。

1:11,000,000

生じたものであると言えるだろう⁷⁾。

一方琉球では、薩摩藩の侵攻や中国における王朝の交替（明清交替）など近世初期における外的環境の急激な変化に、旧来の政治体制では対処しきれず様々な問題が噴出していった。だが、この状況は羽地朝秀（向象賢）・蔡温といった政治家による約一世紀間（十七世紀半～十八世紀半）の改革によって徐々に打開され、琉球は新しい国際関係に対応し得る王府機構を持った国家へと、国内的にも対外的にも自己変容を遂げるに到ったのである⁸⁾。すなわち近世琉球は、中国・日本という二つの支配論理を前提に、それらと独自の国家構成原理を不可分に整合させて初めて安定し得た国であったと言える⁹⁾。

こうした近世琉球の状況は、研究史上しばしば「両属」と表現され、従来の研究では、「薩摩藩の実質的支配／中国の形式的・名目的支配」と捉えられがちであった。だが現在では中国か日本かという選択の問題ではなく、この二国との複雑な関係があるがために琉球王国は（中日どちらにも完全に包摂されないような）自律性 (autonomy) を維持できたのだとする見方が主流である¹⁰⁾。この見方は宗主国による上からの領有の論理ではなく、琉球側の歴史的主体性を重視して琉球史を読み解く方向性の上にあり¹¹⁾、筆者も基本的にこの立場から本稿を執筆している。そしてこの立場から現在の研究状況を眺めるに、未だ十分に明らかにされておらず、今後様々な側面から明らかにされるべきことは、近世琉球が「両属」という特性の中で獲得した自律性の内実——特にそれがどの程度「組織的・制度的」なものであったのかという点——であるように思われる。

必ずしも調和せず、時に矛盾した中日二国の支配論理は、琉球側からはどのように扱われたのであろうか。曖昧に放置されたのか、それとも自覚的に調整されていたのだろうか。もし后者であるならば、琉球王国という「(中日の支配論理の) ゾーンの境界 (frontier)」の中に、王国自身が自主的に管理・運営していた「実質的なライン (≒継ぎ目)」 (boundary) としての政治的境界を探しあてることができる。本論文ではこの政治的境界に、近世琉球における中国人漂着民の船隻・積荷の処置の問題を切り口として具体的に迫ってみたい。

2. 近世琉球における中国人漂着民の船隻・積荷の処置

当時の他の東アジア諸国と同様、近世琉球でも異国人漂着民の救助・送還が行われていた。彼らはその帰属によって——例えばキリスト教の旧教国の出身であるかどうかなどによって——対応に区別が設けられており、その中で「中国人・朝鮮人・出所不明の異国人¹²⁾」は同じ範疇に括られ原則的に同等の処置を施されることになっていた。彼らは基本的には自船で帰国させられ、それが不可能な場合には琉球船で中国に送還され、中国人以外の漂着民は中国を経由して自国に送還されることになっていた¹³⁾。

(1) 漂着民の船隻・積荷の処置に関する日中の支配論理

漂着民に対する処置の内、中日の支配論理が鋭く拮抗したのが船隻・積荷の処置であった。

周知のように徳川幕府は異国船との貿易を厳しく制限しており、この原則に則って漂着民とのいかなる商売も禁止されていた¹⁴⁾。これを受けて琉球王府は、使用不可能になった漂着船は（買い取ったりせずに）焼き捨てること（「焼化」）や、漂着船の積荷の売買禁止などを自国の法度として規定していた¹⁵⁾。

一方、清代中国では漂着民に対する撫恤的処置の一環として積荷・船隻の「換金」が制度化されていた¹⁶⁾。そのため、琉球が中国へ従っていることを知る漂着民（特に中国人）が、自国同様の処置を琉球側に求めてくる可能性があった。だがその場合、建前上「日本との関係がない」はずの琉球が、日本の貿易禁制を理由に換金要求を断ってはつじつまが合わない。すなわち、日本側からの規制（＝琉球の国法）と中国の規範（＝漂着民側の「常識」）がほぼ相反するものであった船隻・積荷の処置には、いつ問題が生じるとも知れない矛盾が内包されていたのであった。

(2) 「商売厳禁」を支える体制

琉球では、日本からの規制によって自国の法となった「漂着船との商売厳禁」の方針を維持するための、或いは少なくとも日本に対してこの方針を「遵守している」と見せかけるための、政治的な構造が存在した。

例えば、琉球の北京官話テキストである『百姓官話』は、中国人漂着民と琉球の通訳官との問答形式の対話集であるが、ここには漂着民からの積荷の売却要求を断る次のような「対話」が掲載されている。

（漂着民の白世A）「あの豆は、我々が帰郷するための旅費として、全てを頼りにしているものです。既にかびが生えてしまったものもありますが、まだよいものも幾らかあります。向こうへ置いたまま日数が長くなってしまうと、中で熱が生じて全てだめになってしまうでしょう。通訳官から役人（老爺）に相談して下さいお願いします。どんな価格でも、ここで売っていただけるのなら、我々は感謝に堪えません。」〔這幾担豆子、我們回家的盤纏全靠着也、如今雖有些A 的、也B 有些好的、恐怕放在那裡、日子久了、裡頭發起熱來都是沒幹的了、求通事替老爺相議、不論甚麼價錢、這裡替我賣去、弟們感恩不尽。〕

（琉球の通訳官）「我が国の王法では、貴国から漂着した船と商売をすることを、厳しく禁じていて、誰もそれを敢えて犯しません。ですからその豆を売ることは絶対に出来ないことなのです。」〔我們這裡的王法、貴國有飄來的船、都不替他買賣、着實嚴緊誰敢故犯、這個豆子要賣斷然使不得的。〕¹⁷⁾

この『百姓官話』は、当時琉球で最も流布していた官話教本の内の一つでありかつ最上級のテキストであったとされる¹⁸⁾。そして琉球の最高学府であった国学（1798 年創設）の定期試験における第一の要目は「官話」であった。つまり琉球では上記のような漂着民への対応が、王国の支配階級である士族層¹⁹⁾によって官話学習という形で習得されていたのである。

また^{みひら}三平等兼題という模擬試験（上位者には管理登用試験である科試を受験する資格が与えられた）の問題と成績上位者の回答（兼添削）を集めた「三平等兼題分言集」²⁴⁰には、「[中国において]『琉球に中国人が漂着した時、彼らが積み荷を売却したいと申し出たら、代銀か品物で買い取り、漂着人が困らない様に取り計らえ』と福建布政司から命じられたことについて、[中国に駐在中の琉球役人が] その用意ができないと請願し、願いの通りに済んだという事。』²⁴¹を薩摩藩に報告する際の趣旨を尋ねる問題が含まれている²⁴²。つまり、中国人漂着民の積荷に関して、中国側（具体的には福建布政司）から琉球の処置を清同様に改めるよう命ぜられた場合を想定して上記の問題が出されたのである。

文言集には一番の成績を取った三人の回答が掲載されている。この内、汀志次村嫡子真栄城筑登之^{チクドゥン}という者の回答書（添削済）は下記の通りである。

…漂着人の荷物買い取りは〔薩摩藩から出された〕異国方御条書²⁴³で禁じられているので、清に滞在中の存留通事が申し立てた趣旨は「琉球は元来金子が生産されず国内で流通しているのは鳩目銭という非常に細薄なものです。他国人への交通も出来ず、進貢・接貢船の費用（銀）も『宝島商人〔日本のことを隠蔽するため「宝島」という架空の領域名で称した〕』に頼って求めています、宝島もずっと不景気で工面が難しく、要求は容易には満たされず、ようやく定例の銀高だけを用意し余計な銀は一切無く、かつ品物も黒砂糖・焼酎・その他全て軽品で、小国なので元々出来が少ない上、銀子・品物を求めるため宝島商人に渡すので至って貧しいのです。但し毎年中国に渡る吏員たちは年々昆布・寒天・フカヒレ等の品々を持ち渡っていますが、これも国産は僅かばかりで多くは宝島を頼って買い取りようやく中国に持っていける分だけを調達するというのが現状なので、漂着民の荷物は代銀でも代物でも買い取る用意はできませんので、何卒お許し下さい。」と願って、その通りに済みました。〔(前略) 在唐之存留申立之趣ハ、琉球之儀素々金子生産無之國中取遣ハ鳩目銭与申至而細（細カ）薄ニ有之、他国人江之交通不罷成、進貢接貢料銀も宝島商人を便相求候処、彼表も連々不自由成才覚六ヶ敷有之由ニ而尤（求カ）方容易ニ不相達、術（漸カ）定例之銀高迄を相調余計逆者一切無之、且又品物之儀も黒砂糖焼酎其外惣而輕品々ニ而候処、全体小国ニ而夫々出来少有之候上、銀子品物求用ニ宝島商人江相渡申事ニ而至而不自由有之、尤毎歳渡唐之面々八年々昆布かんてんふかのひり類之品々持渡申事候得共、是以国産者僅計ニ而多分右島人を便買取漸渡唐持用迄を相達差足候振合ニ而、旁以漂着人積荷物代銀又者品物ニ而も買取候儀不相調候間、何卒許客（容カ）有之度願立、其通為相済由。〕

この文章から、少なくとも「薩摩向け」には「漂着民の積荷を換金・換物するようにとの命令が清から出された場合には『小国の貧しさ』を理由に断る」という体裁を取るように、官吏予備軍に教え込まれていたことが分かる。すなわち中（清）・日双方の規制が相対した場合、「日本の規制に従っているという対面を日本（薩摩）向けに保持すること」が士族層に徹底して浸透させられていたことが窺えるのである。一方清に対しても、実際この回答に

見られるような「貧しさ」を口実とした対処が想定されていたようである。ただ同時にその言い訳の虚構性・限界性も危惧されていた²⁴⁾。

以上見てきたように、琉球では「商売厳禁」の方針を支えるための対応法が、原則的には官吏登用試験のための学習の中で、王府の構成員（とその予備軍）である士族たちによって恒常的かつ広範に習得される構造が存在していたのである。

(3) 王府による「商売厳禁」の違反

ところが前述のような漂着船との「商売厳禁」の方針を支える用意が周到になされていた一方で、この方針は王府自身によってしばしば違反されていた。以下、具体例として四つの違反例を挙げてみたい。

違反例 1 は、琉球で船隻を換金した中国人漂着民の事例（1749 年）である。この換金の事実は、中国側へは咨文という形式の書簡によって事実通りの報告が行われたが、後日薩摩藩へ提出されたこの咨文の写しは、琉球側によって改竄され換金の事実は削除されてしまっている。すなわち中国へは船隻・船具等は「土地の者に売り与え、その代金銀 350 両と所持品を、船戸の澎世恒に手渡し受け取らせた」と報告されているのに対し、薩摩へは「〔船隻・船具等は〕当地に委ね置き、その所持品のみを、船戸の澎世恒に手渡し受け取らせた」と伝えられているのである。

これらの史料の出典である『歴代宝案』は、琉球の外交文書及び文案の集成として近世期に二部編纂され王城（首里）と久米村（那覇）に保管されていた。双方とも現存せず、現在

……因將該船併桅篷擺繩等項
委置本地只將其所帶物
「賣與土民其價銀參百伍拾兩
件遞與船戸澎世恒領收
併所帶物件遞與船戸澎世恒領收」
……

右咨文唐江差上其稿御國許江差上候
處漂着唐人船賣買之儀御禁止候間
於御當地右船買取置候儀不可然由
年頭御親方申越有之此旨被仰渡候二
付御國許江者朱書之通相直シ御届相
濟申候後日爲見合如斯二候也
附執照之儀茂同斷ニ相直シ御届有
之候事

史料 1：清への咨文（太字）、改竄部分（細字）、参照用のメモ（後半の和文）。沖縄県立図書館史料編集室編『歴代宝案』校訂本第四冊、沖縄県教育委員会、1993 年、No.2-30-16。『歴代宝案』台湾大学、1972、2558 頁。（太字による強調は筆者による。）

利用できるのは久米村本の写本のみである。対中国外交の実務を担った久米村人に保管されていたこの版には、しばしば「参照用」のメモ書きが付されている。史料 1 は、この久米村本に該当記事がどのように載せられているかを示したものである。重要なのは末尾に付された和文のメモで、そこには以下のように記されている。

この咨文は清へ差し上げ、その原稿を薩摩へ送ったところ、漂着中国人の船を売買することは禁止されているので、琉球でこの船を買い取り置いたことはそのまま書いてはいけなと、[薩摩に派遣されている] 年頭使者²⁵⁾の御親方が伝えてきた。この旨を仰せ渡されたので、薩摩へは朱書の通り [つまり「カッコ」右のように] 修整し御届を済ませた。今後の参照のためこのように [記述] した。

付記。執照²⁶⁾も同断に修整し御届けした。

このようなメモや朱書きの訂正案が残されていたことによって、次のことが分かる。①琉球は「日本の貿易禁制」に違反して漂着船隻を換金し、その「事実」を薩摩に対して隠蔽していた。②しかしそれは中国側の支配論理に反することではなかったため、中国側へは事実通りの報告をした。③中国へ送った書簡（咨文）における該当記事は、薩摩への報告ルート²⁷⁾の途中で薩摩駐在の琉球役人から最終的チェックを受け改竄・隠蔽された。④後日そのことを伝えられた外交文書作成機関（久米村）は、同じ轍を踏まないために参照用に保管されている書簡にメモや訂正案を書き入れた。

但し漂着民側の意図はともあれ、琉球側が常に経済的利潤と漂着船を結びつけていたとは断定できない。なぜなら船隻換金の事例が史料に現れるのは管見の限りでこの一例のみと低く、原則的には船隻の「焼化」が連綿と行われていたからである²⁸⁾。

またやや本題から反れるが『歴代宝案』という史料の可能性にここで一言触れておきたい。周知の通り『歴代宝案』は琉球の中近世外交史の根本史料として重視され様々な研究に使用されてきたが、現在我々が見ることのできる版（久米村本）は「作成者の参照用」のものであったという性質にはこれまで殆ど着目がなされてこなかったように思われる。しかし前掲の違反例 1 のように、この性質に着目することで明らかになる点もある。今後このような視角からも、再度その性質を見直していく必要があるだろう。

さて、違反例 2 は、船隻処分用「御恵銀」給付問題が発生した中国人漂着民の事例（1844 年）である。小舟で漂着した三名の中国人に対し、琉球側は小舟ゆえ危険であると「琉球船による送還」を勧めたのであるが、漂着民は一貫して自船で帰ると主張し続けた。このため直接処置に当たっていた担当官から王府に対して下記のような提案がなされた。

遙かに遠い難海を、小船に三人で乗って帰帆すると申し出たのは、何にせよ貢船で帰国すれば、本船は焼化を命ぜられることを惜しみ、前述のような帰帆の願い出がなされたのでしょうか。（中略）その時は相当の御恵銀などを与えられれば、進貢船に乗って帰帆するかもしれないと存じます。〔一遙遠之難海、小船に三人乗二而帰帆申出候儀、兎角貢船に致帰国候ハ、本船焼捨被仰付候を惜、右様帰帆之願茂可有之哉。（中略）其

節者相当之御惠銀等被成下候得者、進貢船G 乗合可致帰帆哉与奉存候。〕²⁹⁾

そこで総責任部局である鎖之側という役所は現場からの提案を受け入れる旨を決定した。この決定はまず国王に、次いで那覇に駐在しているお目付役の薩摩役人（在番奉行）に報告し認可を得なくてはならない³⁰⁾。この時の「国王への報告」と「薩摩役人の報告」が史料 2 である。これらを比較すると、国王へは「相応之惠銀相与可申旨…（相応の惠銀を与えるとの旨を…）」³¹⁾と惠銀について事実通りの言及がなされているのに対し、薩摩役人への報告³²⁾の中では惠銀に関する記述だけが脱落していることがわかる。

つまり琉球王府は、漂着民に金銭（御惠銀）を払う行為に関しては全く問題にせず、その行為に係る情報を薩摩側に対して隠蔽しただけであり、その隠蔽は日本の商売厳禁の規制に配慮しているためであると推測できる。

違反例 3 は、船隻が焼失してしまった中国人漂着民から「焼化」の「偽」証文を取った事例（1836 年）である³³⁾。この時の船は「にわかに出火し風が強くて消火できず全て焼失してしまった（俄ニ出火出来風立強難取消皆共及焼失候）」ために「どのような難癖を付けられるかと非常に心配なことであった（何様難洪可申懸儀茂難計事ニ而至極為及心配事候）」が、

A. 国王への報告（上聞）

口上言上

此節漂着唐人共儀、僅之人数、船茂別而小振有之、遠海乗渡候儀念遣存候付、当秋進貢船便致帰帆候様、尤、本船留置候者迷惑も可相及候間、相応之惠銀相与可申旨、訳而相談為致候処、進貢船G 福州迄被送越候ハ、猶又在所者遠方之事ニ而、中途長々日数を込、諸失却太分相掛、至極及迷惑事候。自船之儀、小振二者候得共、当時節、海上平和有之事候付、順風見合致出帆候ハ、三人ニ而海上働方も無支、早々本國江可罷帰候間、本船G 帰帆仕度旨申出有之、船功之者共江も吟味申渡候処、当時節日和見合致出帆候ハ、随分無難乗届可申段申出候間。船修甫申渡、網具・唐針等相渡、弥、本船G 帰帆させ候様被仰付度、御書院当浦崎里之子親雲上御取次、達上聞、相済候事。

B. 那覇の在番所への報告

此節漂着唐人共儀、人数三人ニ而、船も別而小振有之、遠海乗渡候儀無覚束候付、当秋進貢船便致帰帆候様為致相談候処、進貢船G 福州江送越候ハ、猶又在所者遠方之事ニ而、中途長々日数相懸、至極及迷惑事候。自船小振二者候得共、当時節、海上平和有之事候間、順風見合致出帆候ハ、乗組三人ニ而海上働方も無支相達、早々本國江可罷帰候間、本船G 帰帆可仕段申出候付、船修甫申渡、縄具等相渡、弥、本船より帰帆為致度御座候。此段御相談可申上旨、摂政・三司官申付候。以上。

六月十二日

池城親雲上

史料 2（太字部分は筆者による）

漂着民の処置のため異国方大夫・異国方通事に各々任じられた久米村の牧志里之子親雲上³⁴⁾と松本親雲上³⁵⁾は「色々骨を折って中国人を具合よく収め、船は国法の通り焼化したという趣旨の証拠書などを出させ、諸事をうまく処理した（段々骨折を以唐人方都合向克取合船之儀者國法通焼収為申筋證據書等差出させ諸事取計宜為有之…）」のであった。彼ら二人は「このような大変な異変の時に差し当たりうまく処理して難渋なく治めたひとかどの働きは殊勝の至りと思し召されて（右様不輕変時差当取計宜有之所より無難渋相治一稜之働殊勝之至被思召候）」、王府から褒賞され、かつその功績を自らの家譜に掲載することを公許されたのである。

つまり琉球王府では実際に船隻を焼化したかどうかではなく、場合に応じた処置をして、なおかつ「国法（つまり日本からの規制によって自国の規定となった貿易禁制）」に従っているという体裁を整えることが重視されていたことが窺えるのである。

違反例 4 は漂着中国船の積荷を王府が買い取った事例（1825 年）である。久米士³⁶⁾の奥間里之子親雲上³⁷⁾（毛有増）の家譜には「難民³⁸⁾の貨物を公買するために、命を受けて、総官役³⁹⁾と兼ねて公買の勤める係となり、よく職務を務めて褒書を賜った。（因公買c 民貨物、奉 憲令、帶總管役、d 其係役、能辨事務、頒賜褒書）」⁴⁰⁾という記事と、以下のような褒書が載せられている。

その方は、漂着中国人の持ち渡った豆・ナツメ・釘・金物を内密に買い取る係を命ぜられたところ、伊差川通事親雲上と共に精を出して働き、中国人を納得させ値段を少し安くさせ、かつ荷物の件で船主一人と残り全部の中国人が不和になり遂に喧嘩の兆候が見えて同居が難しいと船主が申し出たので、朝鮮屋敷へ引き移し、どのように落着かせるべきかと非常に〔国王に〕御心配をお掛けする事であったが、船主に色々申し入れ、前述の豆代から船中の者へも心付けをやって双方を和睦させたことを上申したところ、殊勝なことと思し召されて、そう申し渡すよう御指図があった。〔其方事、漂着唐人持渡候豆e 釘加那もの、内々買取方係被申付候處、伊差川通事親雲上相合精々相働、唐人共落着させ直段心安取入、且荷物一件ニ付船主忝人惣唐人中与不和ニ相成終ニ喧嘩之模様相見得同居難成由船主申出趣有之、朝鮮屋敷江引移如何首尾引結可申哉ト甚爲及御心配事候處、船主方段々申入右豆代ヨリ船中之者江（も）心付双方和睦致させ候段遂披露候處、殊勝之儀被思召候、此段可申渡旨御差圖ニ而候、以上。〕

奥間里之子親雲上の功績に関しては、彼の息子（毛良弼）の「履歷書」⁴¹⁾にも前掲の褒書と共に下記のような記載がある。

漂着中国人が持ち渡った豆・ナツメ・釘・金物を内密に買い取る係を命ぜられ、中国人に相談したところ、法外な高値を言い掛けられたが、色々精を尽くして相談し番銀 1500 枚の代で買い取り、但し代金は清に送還後に渡すことを約束し私⁴²⁾連判の証文を渡し、かつ荷物の件について船主 1 人と残りの全中国人が不和に成ったので、〔船主を〕朝鮮屋敷⁴³⁾へ引き移して置いたところ、これも和睦させたので次の通り御褒美を命ぜら

れた。〔漂着唐人持渡候豆E 釘加那もの、内々御買取方係被申付、唐人方江相談仕候處、殊之外高代申掛候處、段々尽精談代番銀千五百枚ニ而買取、尤代錢モ渡唐之上相渡候段致約束私連判之證文相渡、且荷物一件ニ付船主屯人惣唐人中ト不和相成、朝鮮屋敷江引移被置候處、是又和睦致サセ候ニ付、左之通御褒美被仰置候。〕

これらの記事から次のことが分かる。①奥間里之子親雲上は王府の命を受けて漂着中国人の貨物を購入した。②購入は「内密に」実施された。③琉球側が値切り交渉を行った。④代銀は送還後、清で精算した。⑤この購入が原因で漂着民間に生じた不和を、代銀から心付けを出させて解決した。⑥これらの処置の責任者（奥間里之子親雲上）が王府から褒賞された。⑦そのことが息子の履歴（功績）にも掲載された。

またこの売買行為は、清宛の外交文書の中に一切の言及がないことから、清向きの体裁の中でも隠匿されていたことが窺える。だが琉球国内では特に隠された形跡はない。漂着民の積荷を王府が購入した事例は、管見の限りこの一例だけであり、またその事実を国内で隠した形跡がないことを鑑みると、本事例は恐らく「例外的」なものであったと思われる。

琉球王府は「商売厳禁」を支える構造を有する一方で、事例 1～4 に挙げてきたようにしばしばこの方針を自らの手で違反してきた。それは中日の支配論理の矛盾を調整するため、或いは現状に折り合いを付けるため、或いは明確な利潤追求のために行われ、関係者は度々王府による褒賞の対象にさえなり、その功績は家譜への記載を公許されたのである⁴⁰⁾。

3. 終わりに

ここまでの議論をまとめると次のようになる。①琉球は中日の支配論理を明確に区別し、それらを組織的・体制的に調整するような「国家運営」を国内的に行っていた。②琉球王府では、「国法」遵守よりもむしろ、王府の側から見て整合性を持つような選択（中日の支配論理の矛盾調整、現状に折り合いを付けること、明確な利潤追求など）を行い、同時に中日それぞれに向けた「支配論理受け入れ」の体裁を維持するということが重視されていた。③王府の機構には、これを支える士族層が②のノウハウを学習という形で習得し、その実践を士族個人の功績と結びつけて推奨するような構造が存在していた。

すなわち、それ自体が中日の支配論理のゾーンの境界 (frontier) であった近世琉球においては、琉球自身が自律的に管理・運営する両支配論理のライン的境界 (boundary) が存在していたのである。それは言い換えれば、琉球が二つの支配論理を繋ぐ関節 (joint) としての機能を持ち、それを自らの国家構成原理の中に不可分に組み込んでいたということを意味すると言えらう。

狭間—特に「両属」的狭間—をどう捉えるかという問題は、琉球のみならず、例えば同時期における対馬（朝鮮・日本の狭間）、カンボジア（シャム・ベトナムの狭間）、カザフ（ロシア・清の狭間）などに共通のものである。これまで概して狭間を発生させる大国の論理で語られてきた感が否めない「両属」研究であるが、これら各地域の個別的な研究が深化されつ

つある現在、「狭間」側から「両属」を捉え、比較検討し相対的に理論化していく必要があるように思われる。

(付記) 本報告は平成 14 年度文部科学省科学研究費補助金(特別研究員奨励費)による研究成果の一部である。

(註)

- 1) 高良倉吉「琉球・沖縄の歴史と日本社会」朝尾直弘・網野善彦・山口啓二・吉田孝編『日本の社会史 第一巻 列島内外の交通と国家』岩波書店、1987 年、361 頁。
- 2) より厳密には、極めてバウンダリー的な国境を有していたと言える(註 3 参照)。
- 3) ブルース・パートンは、政治地理学における国境(≡政治的境界)とはバウンダリー(boundary)とフロンティア(frontier)という二形態を有し、前者が一次元の線(line)であるのに対し後者は二次元の地帯(zone)であると整理している(ブルース・パートン『日本の「境界」』青木書店、2000、23-24 頁)。
- 4) 中国人は国内的な社会・政治秩序と同様の原則を国外的に表現することで対外関係を捉える傾向にあり、このような対外関係は中華主義の概念と中国の優越という前提に特徴付けられた、階層的かつ不平等なものであった。このアジアにおける国際秩序を Fairbank は「中国型世界秩序(the Chinese world order)」と呼んだ(Fairbank, John K.1968 “A Preliminary Framework”, in Fairbank, ed., *The Chinese World Order*. Cambridge, MA.: Harvard University Press, 1968, p.2.). トビはこれを「華(すなわち中国人)と夷とを二分する『華夷秩序』や、『朝貢体制』とか『冊封体制』と比べて価値判断から自由な言葉である」と評価している(ロナルド・トビ『近世日本の国家形成と外交』(速水融・永積洋子・川勝平太訳)創文社、1990 年、138-139 頁)。
- 5) 幕府は、日明関係正常化(=明の冊封体制への加入)を放棄し、自らを頂点とする外交儀礼上の序列(朝鮮・琉球・オランダ・中国)を構築し、日本の優越を認めそうもない中国とは外交を断絶して、あたかも日本中心な華夷秩序が存在するような環境を作り上げたのである。(ロナルド・トビ前掲書)
- 6) ロナルド・トビ「変貌する『鎖国』概念」永積洋子編『「鎖国」を見直す』山川出版社、1999 年、10-11 頁。
- 7) 隠蔽に関しては、紙屋敦之『幕藩制国家の琉球支配』(校倉書房、1990 年)、喜舎場一隆「近世期沖縄の対外隠蔽主義政策」(『海事史研究』16、1971 年)等を参照されたい。
- 8) 高良倉吉「琉球王国の展開ー自己改革の思念、『伝統』形成の背景ー」岸本美緒ほか編『岩波講座・世界歴史 13』岩波書店、1998 年、77-80 頁。
- 9) この論は、豊見山和行が論ずるところの「近世琉球の王権は島津氏支配と冊封朝貢関係を矛盾なく整合させて初めて成立する王権であった」(豊見山和行「近世琉球の外交と社会ー冊封関係との関連からー」『歴史学研究』586、1988 年、141 頁)とする見解に、筆者なりの補足を若干加えたものである。また漂着民に対する処置制度の側面から、渡辺美季「近世琉球の対『異国船漂着』体制ー中国人・朝鮮人・出所不明の異国人の漂着に備えてー」(琉球王国評定所文書編集委員会編『琉球王国評定所文書 補遺別巻』浦添市教育委員会、2002 年)でも具体的に実証した。
- 10) 豊見山前掲論文、及び Smits, Gregory. *Visions of Ryukyu – Identity and Ideology in Early-Modern Thought*

and Politics. Honolulu : University of Hawai'i Press, 1999, p.156.

- 11) 豊見山和行「複合支配と地域 従属的二重朝貢国・琉球の場合」濱下武志・川北稔編『地域の世界史 11 支配の地域史』山川出版社、2000 年、215 頁。
- 12) 明確な定義は見当たらないが、東南アジア等の清の朝貢国からの漂着民を包括して指すために用いられたようである。
- 13) 琉球に漂着したこれらの異国船に対する処置体制に関しては渡辺前掲論文（2002 年）を参照されたい。
- 14) このことは、例えば異国船漂着に関する原則的な規定となった 1704（康熙 43・宝永元）年の「覚」（薩摩藩から琉球王国へ）にも明確に規定されている。（豊見山和行「一七世紀における琉球王国の対外関係－漂着民の処理問題を中心に」藤田覚編『十七世紀の日本と東アジア』山川出版社、2000 年）
- 15) 例えば、漂着船に対する処置マニュアル「進貢・接貢船、唐人通船、朝鮮人乗船、日本他領人乗船、各漂着并破船之時、八重山諸島在番役々勤職帳（1816）」（石垣市総務部市史編集室編『石垣市叢書』4、石垣市役所、1993 年）が挙げられる。
- 16) 渡辺美季「清代中国における漂着民の処置と琉球（1）」『南島史学』54、1999 年。同「清代中国における漂着民の処置と琉球（2）」『南島史学』55、2000 年。
- 17) 瀬戸口律子『百姓官話全訳』明治書院、1994 年、208 - 211 頁。
- 18) 村上嘉英「近世琉球における中国語学習の様態」『東方学』41、1971 年、4 頁。
- 19) 琉球の身分制は原則的に士（士族）と農（百姓）である。
- 20) 「三平等兼題」は首里三平等の平等学校所（全三校）で毎月行われていた。なお、この模試と史料に関しては田名真之「平等学校所と科試」（高良倉吉・豊見山和行・真栄平房昭編『新しい琉球史像』榕樹社、1996 年）を参照。
- 21) 琉球江唐（人脱力）漂着之節、積荷致売払度申立候ハ、代銀又者品物ニ而も買取、漂着人迷惑不罷成様可取計旨布政司G 被申渡候付、不相調段願立其通為相済由。
- 22) 「三平等兼題文言集（琉球史料 141）」那覇市企画部文化振興課編『那覇市史』資料篇第 1 巻 11 琉球資料（下）、1991 年、211 - 213 頁。
- 23) 宝永元年の「覚」のこと。註 14 参照。
- 24) 琉球は、年々銀子を過分に持ち渡り、福州で品物を買取る事を官人達はよく知っているので、銀子が無いという言い訳で漂着中国人の荷物を買取らないでいては、決して落着せず鬱憤を差し挟み、帰帆して官人方へ何か讒言で訴えるかも知れず、万一渡唐船（貢船）の荷物を詳しく調べ大分の銀高が露見すれば、中国との御取り合い（お付き合い）に不都合になり、往々にして進貢の御支障にも成るだろうと考える。〔琉球之儀、年々銀子過分持渡於福州品物買取候段、官人共克存知之事候得は、銀子無之譯を以漂着唐人荷物不買取候ては、決して不致落着鬱憤を差挟、歸帆之上官人方へ何歟讒訴儀も難計自然渡唐船荷物委く被相改大分之銀高相顯候ハ、唐御取合不都合相成往々進貢之御支障にも成立可申と奉存候事。〕（「古老集記〔類の二〕」小野武夫編『近世地方経済史料』第 10 巻、近世地方経済史料刊行会編、1932 年、369 - 370 頁）
- 25) この時の年頭使は毛氏座喜味親方盛秀（横山重編『琉球史料叢書』第四巻「中山世譜附卷」東京美術、1972 年、54 頁）。年頭使とは薩摩藩主に年頭の挨拶をする使者で、そのまま 18 ヶ月間、在番親方として鹿児島琉球館に詰めた（深瀬公一郎「鹿児島琉球館に関する基礎的考察」『沖縄学

研究会論集』4、1998年、81頁）。

- 26) 沖縄県立図書館史料編集室編『歴代宝案』校訂本第四冊、沖縄県教育委員会、1993年、No. 2-30-17。『歴代宝案』台湾大学、1972年、2558頁。
- 27) 王府（摂政・三司官）→『在番親方（鹿児島琉球官へ出向）→琉球仮屋守（1784年に琉球館開役と改称）』→（勝手方用人）→琉球掛（勝手方家老）→薩摩藩家老衆（家老座）という政治的取次ルートの事。（『カッコ』内は鹿児島琉球館、下線部が琉球王府或いはその人員）（※深瀬公一郎氏の教示と、氏の前掲論文84頁による。）
- 28) 後述の「御恵銀」を巡る琉球側の姿勢も参照のこと。
- 29) 琉球王国評定所文書編集委員会編『琉球王国評定所文書』第一巻、浦添市教育委員会、1988年、597 - 598頁（以下『評定所』①と略記）。
- 30) この手続きに関しては渡辺前掲論文（2002年）19頁を参照のこと。
- 31) 『評定所』①、598 - 599頁。
- 32) 『評定所』①、599頁。
- 33) 「魏姓家譜（楚南家）」（那覇市企画部市史編集室編『那覇市史』資料篇第一巻六家譜資料二、同編集室、1980年、40 - 41頁）、「林氏家譜（平安座家）」（同前、866頁）。
- 34) （唐名）魏學源
- 35) （唐名）林世爵
- 36) 久米村に居付（戸籍）を持つ士族。
- 37) 後の垣花親方
- 38) 福建省商船（乗員38人）
- 39) 漂着民を清へ送還する護送船の役職の一つ。
- 40) 「毛氏家譜（垣花家）」（那覇市企画部市史編集室編『那覇市史』資料篇第一巻六家譜資料二、同編集室、1980年、946頁）。
- 41) 毛氏家譜小宗六世致志の末尾に添付されていた毛良弼の「履歴」（沖縄県公文書館影印本）。また後日、垣花稔氏より「履歴」の写を賜った。記して深謝申し上げる。
- 42) 履歴書の書き手（毛良弼）のこと。
- 43) 1824年に漂着し、該事例の中国人漂着民と共に護送船で清に送還された朝鮮人漂着民を収容していた泊村の仮小屋のことを指していると思われる。
- 44) 家譜は該当家の他に、王府に一部保管されていたが、これを薩摩側（在番奉行など）が検閲することはまず無かったと考えられる。（田名真之氏の御教示による。）